

学校運営協議会との協働による「総合的な探究の時間」の実践

北海道本別高等学校 学級数3 (校長 近藤 浩文)

1 はじめに

令和2年4月、本校に学校運営協議会が置かれ、念願のコミュニティー・スクール（以下、「CS」という。）となった。地域の人的・物的資源の活用が不可欠である「総合的な探究の時間」の探究活動を学校運営協議会との協働により実施することとし、CSコーディネーターが地域との連絡・調整を行い、地域人材が「コーチ」として生徒たちをサポートする体制を整えた。コロナ禍でフィールドワークの時間や場所が制限される中、生徒たちはコーチのサポートを受け、放課後や夏休み中にミーティングや調査活動を実施し、探究のプロセスをとおして多くを学ぶことができた。

ここでは、CSに指定されるまでの経緯と学校運営協議会との協働体制の構築について述べる。

2 CSに指定されるまでの経緯

(1) 学校運営上の課題

授業改善の取組を進める中で「大きな壁」があると感じた。それは、新学習指導要領の基本的構想である「コンテンツベース」から「コンピテンシーベース」への大きな発想転換と主体的・対話的で深い学びについて本質的に理解することであった。この壁を乗り越えるには、研修と授業実践を繰り返しながら生徒の変容を実感することが重要であり、教職員に対して時間的・精神的な余裕を確保しなければならない。そのためには、「チームとしての学校」の概念と同様に、教職員が授業改善という重大な責務に専念できるよう、地域との連携により教職員の負担を軽減することが必要である。

また、「総合的な探究の時間」の探究には、「実社会や実生活の事象」、「解決の道筋がすぐには明らかにならない課題や、唯一の正解が存在しない課題」を取り上げるという特質がある。このような探究活動の実施に当たっては、地域の人的・物的資源を活用し、学校教育を学校内に閉じずに、目標を地域と共有・連携しながら実現させなければならない。

新学習指導要領が目指す教育活動を実践するには、地域との組織的で持続可能な連携体制を構築することが必要であると考え、学校運営協議会の設置に向けて検討を始めた。

(2) 本校の現状と地域の思い

本校は、昭和17年に旧制中学校として設置された伝統校である。現在は普通科のみの設置となったが、かつては普通科、商業科及び定時制農業科を有し、芸術・文化・スポーツに秀でた人材を輩出してきた。しかし、少子高齢化や人口減少が急速に進行するとともに、町内の中学生の中に町外の高校への進学を希望する生徒が増加し、本校の生徒数の減少が続いた。

一方、高校卒業までは地元に残り学びたい生徒も一定数いることや、地域の多くの人たちの「地域にとって誇らしく魅力ある高校であり続けて欲しい」との願いから、本別町や本別町教育委員会（以下、「町教委」という。）は、本校の存続のために、入学生に対する助成や本校の教育活動に対する人的・物的な支援を行ってきた。

(3) CS本別高校スタイルの確立

ア 他校視察から見たもの

(ア) 北海道土幌高等学校のCS（令和元年6月）

町教委の社会教育推進員がCSコーディネーターを務め、週に3日間校内で勤務し、教職員と連携して、効果的に地域と協働した学習活動の企画・調整・運営を行っている。

CSの運営におけるコーディネーターの重要性を改めて認識することができた。

(イ) 北海道清里高等学校のCS（令和元年7月）

学校運営協議会に3つの部局が設置されており、各委員は分担して各部局を運営し、立場や専門性を活かした役割を担い、直接的、間接的に教育活動に参画している。理想的な組織体制であり、本校にもその方向性を取り入れたいと思った。

イ 夏季休業期間中における地域との連携から見たもの

平成31年4月からスタートした本校の総合的な探究の時間「とちかち創生学」の初年度の1年生は、探究活動の基礎を学ぶため「地元の農産物を使ったスパイスカレーの開発」に取り組んだ。探究活動は、地域創生に関する講義から始め、地元企業の食品開発の見学、地元農産物の調査、スパイスに関する講義・実習と進め、カレーのレシピの作成までを授業時間内で行った。

そして、次に示すように、夏季休業期間中の2日間を使い、最後の仕上げとしてカレーの調理とプレゼン・審査を行うための「地域との連携による学校外での学習活動」を計画した。

この取組は、同時に、今後の地域との連携やCS導入の可能性を探るためのチャレンジであり、町教委とPTA役員に趣旨を理解してもらい、生徒の指導と2日間の運営を依頼した。

教職員が立ち会わない2日間であったが、町教委の職員、PTA役員、審査員として依頼した地域の関係者が生徒の指導や支援に当たることにより、生徒たちは周囲に依存することなく、主体的に行動し、グループ内で積極的に協力しながら取り組む姿勢が見られた。

結果としてこの取組は成功し、今後の地域との連携に確かな手応えを感じる事ができた。

夏季休業中における地域との連携による学校外の学習活動

日時 令和元年7月29日(月)・30日(火)

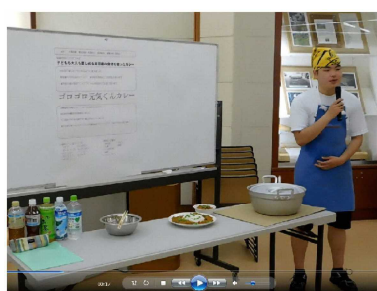
会場 本別町農産物ものづくり館（ゲンキッチン）

指導者 本別町企画振興課職員（ゲンキッチンチーフ）、本別町教育委員会職員2名
本別高校PTA副会長3名

審査員 本別町副町長、本別町企画振興課課長補佐、本別町教育委員会次長、帯広大谷短大助教
本別町商工会青年部、本別町給食センター職員、本別中央小学校栄養教諭
本別中学校生徒2名



カレーの調理の様子



プレゼンテーションの様子



審査結果発表・表彰式の様子

ウ CS本別高校スタイルの確立

他校視察の成果と、本校及び地域の特質などを勘案し、次の方針で独自のスタイルを検討し

た結果、本校の学校運営協議会は、会長に町教委の教育長、委員には、商工会の青年部員、農協の青年部員、振興会会長、学校評議員（元PTA役員）など行動力やネットワークをもった人材を選出し、小・中・高の連携を進めるために近隣の小学校と中学校の校長にも加わってもらった。そして、運営の要であるCSコーディネーターは、町教委の社会教育課の職員2名が自ら進んで引き受けてくれるなど、勢いのある盤石な組織となった。

＜組織づくりの方針＞

- ① 町教委との連携を強固なものとする。
- ② 委員は、学校運営協議会の本来業務に加え、委員自身や委員がもつネットワークを活用して、直接的、間接的に教育活動に参画ができる人材を選出する。
- ③ CSの導入により教職員の負担が増えることのないよう、当事者意識をもち、主体的に行動ができる人物にCSコーディネーターを依頼する。

＜CSの基本方針＞

- ① 高校と地域が一体となり、高校の魅力化のため特色ある教育活動の推進に努める。
- ② 地域を理解し愛着を持った人材を育成するとともに、高校が地域振興の核となるよう教育活動の推進に努める。

設置した部会は表1のとおりである。「とかち創生学部会」は、本校の魅力化を図る教育活動の運営を支援する。また、「異校種間連携部会」、「地域連携部会」は、町内の小・中学校との連携の推進や、高校生の地域貢献活動の推進にも関わるなど、本校が「地域全体の活性化を図るための核となる」というCSの基本方針に則って設置したものである。

表1 学校運営協議会の組織体制

部 会	協 働 の 内 容
とかち創生学部会	○1学年（特産品の開発・地域課題の設定）の推進 ○2学年（地域課題に関する探究活動など）の推進
異校種間連携部会	○国際理解教育の推進 ○小中高の理科教育の振興 ○キャリア教育の推進（インターンシップなど） ○部活動（外部指導者、中学校との合同練習）の推進
地域連携部会	○授業（地域人材の活用） ○学校行事（学校祭における地域との連携）の推進 ○地域貢献活動（ボランティア、イベント参加）の推進

CSが軌道に乗っている先進地域では、「地域と学校の双方が当事者意識を持って協働している」という共通点がある。「CS（地域の学校）」とは、地域住民が地域の学校である高校の教育活動を当事者意識をもって支援するとともに、高校も地域の一員としての当事者意識をもって地域の活性化に貢献することを意味している。

これまでの経験から、まずは管理職が率先して地域活動に参画し、信頼関係を築くことが肝要である。このことが地域連携の土台であると言える。

3 学校運営協議会との協働による「総合的な探究の時間」の実践

(1) とかち創生学の目標と探究の柱

＜とかち創生学の目標＞ 1 正解のない課題に挑戦し探究し続ける力を育成する。 2 次世代の十勝を牽引し地域を支える力を育成する	＜探究活動の3つの柱＞ ① 地域の農産物など特産品を使った商品の開発 ② 地域の課題に対する解決策の提案 ③ 魅力ある地域づくり、街づくり計画の提案
--	--

新学習指導要領の基本理念である「社会に開かれた教育課程」の趣旨と、学習指導要領解説

に記された総合的な探究の時間の特質を踏まえ、さらに少子高齢化や人口減少が急速に進行している地域の現状から、「地域創生」をテーマにした探究活動「とちかち創生学」を設置した。

(2) 第2学年「とちかち創生学」の取組

初年度に「スパイスカレーの開発」に取り組んだ生徒たちは、2学年から本格的な探究活動を始めるため、1学年の後半から「地域の課題」や「魅力ある街づくり」について検討し、2学年から取り組む探究活動のテーマを、表2のとおり設定し、年度末の臨時休業期間中から次のように探究活動を進めてきた。

ア 現状分析と仮説の構築（臨時休業期間中及び登校再開後の約1ヶ月間）

- ① とちかち創生学の総合アドバイザーを依頼した東京在住の外部講師が作成した「YouTube」動画を視聴し、探究のプロセスを学びながら、テーマにおいて課題に関する理解を深める。
- ② 外部講師のオンライン講義を受けながら、現状分析を踏まえ、抽出された課題をどのように解決していくか、シンキングツールを使って仮説を構築する。

イ 解決策の検討（「コーチ」のサポートによるグループワーク）

学校運営協議会が地域に働きかけ、CSコーディネーターが探究活動のテーマに合わせて、主に町の職員の中から適任者を人選し（表2）、「コーチ」によるサポート体制を構築した。学校運営協議会の委員やCSコーディネーター自身もコーチとして加わり、綿密に連絡・調整を行いながら生徒のグループワークをサポートした。コロナ禍で

表2 探究活動のテーマと担当するコーチの所属

	探究活動のテーマ	コーチの所属	人数
A	本別の魅力発信を考える	地域包括ケアプロジェクト情報発信部会	1
B	本別の観光を考える	町教委社会教育課 地域おこし協力隊	2
C	特産品の開発を考える	本別町役場企画振興課商工観光 本別町農業協同組合	2
D	イベントの制作を考える	本別町役場企画振興課商工観光 本別町役場農林課	2
E	本別の環境開発を考える	本別町役場建設水道課	2
F	本別町の福祉を考える	本別町総合ケアセンター	1

フィールドワークの時間や場所が制限される中、生徒たちはコーチのサポートを受け、放課後や夏季休業中にミーティングや調査活動を実施し、探究のプロセスをとおして多くを学ぶことができた。



授業中のグループワークの様子



夏季休業中の調査活動の様子



夏季休業中の特産品の試作の様子

4 今後の課題と展望

この2年間の探究活動「とちかち創生学」の取組は、まさに暗中模索であったが、学校と地域がひとつのチームになったことで、細いながらも道を切り拓くことができたと感じている。今後は、生徒の学びの充実を目指して、より効果的な「支援プログラム」をチーム全員で作成するとともに、オンラインを活用した遠隔地の専門家や大学等研究機関との連携についても検討して行きたいと考えている。1年後は、切り拓いた道が大きく広がっていることを確信している。